
MMWR の ペ ー ジ

米国教育厚生省 (Department of Health, Education, and Welfare) の定期刊行物に、National Communicable Disease Center (NCDC) から “Morbidity and Mortality Weekly Report” (MMWR) という週刊パンフレットが発行されています。内容は合衆国の届出伝染病の週間州別発生速報が主ですがほかに各種感染症の集団発生報告や調査記録なども載っています。その中から興味ありそうな記事を選んで抄録しましょう。

(駒込病院 磯貝 元)

○東洋旅行中に発生した急性胃腸炎

1969年5月4日午前3時30分、東京からシアトルへ向かう国際航空の航空機で、乗客42名中21名が急性胃腸炎を発したためにアラスカのアンカレッジに緊急着陸した。この旅行団の発症前15時間の行動は、他の航空会社の飛行機でバンコックから東京へ飛び、途中ホンコンで一泊している。発病10時間前にバンコック・ホンコン間の機上で夕食を取り、4時間前にホンコンの宿舎で朝食を取っている。追跡調査によつて、ホンコン一泊中に少なく共2名の乗客が既に下腹痛と下痢を発していた。ホンコンから東京へ出発して2時間の間にも同様の症状を発した者もあつたが、残りの大多数の罹病者は東京から本国に向つて離陸直後に発症した。症状は下痢、腹痛の他嘔気、嘔吐があつたが、発熱、悪寒、血便はない。乗客中71才の女性が東京発2時間後に死亡した。剖検で胃、小腸、大腸に肉眼的病変は認められなかつた。アンカレッジの病院に入院して36時間後によく軽快した者が1名あり、他の19名は発症後12時間以内に症状が回復した。

食餌調査と細菌学的検索は施行中である。疫学的に食餌性感染が疑われるが、確実な原因はまだ掴んでいない。

(MMWR, Vol. 18, No. 18, 1969年5月3日号より)

○東洋旅行中に発生した胃腸炎についての追跡調査 (続報)

上記集団発生に関するその後の調査によると、42名の旅行団員中23名が発病(罹病率55%)、内83%は初発症状として胃腸炎の所見があり、下痢(91%)、腹痛(79%)、嘔気(65%)、嘔吐(39%)を訴えたが発熱を見た例はなかつた。1名が死亡し2名が入院した。患者の50%は12時間以内に回復した。

疫学調査の結果、原因食は5月3日夕にバンコックとホンコン間の機上で供された食事と推定される。潜伏期

間は約15時間である。この飛行機に同乗した旅行団以外の乗客の消息については情報を得られなかつた。又搭乗員も発症したという報告はないが、乗務員は機上で食事していなかつた。最終的ではないが食餌調査からその時の食事の中でエビとカニのサラダとカクテルソースが原因ではないかと考えられた。患者からの材料は検査中。

(MMWR, Vol. 18, No. 19, 1969年5月10日号より)

○疫学ノート・メリーランド州 Baltimore のオーム病

1969年1月来バルチモア市域内の住民の間に4例のオーム病患者が発生した。4例共定型的オーム病の症状のあつたオームを最近購入したことが判つた。これらのオームは4羽共ヒトの発症の2週間程前に死んでいる。

第1例は55才の男性で、1月1日に強い呼吸困難、黄疸、知覚鈍麻を主訴として市内の病院に入院した。テトラサイクリン投与で徐々に軽快した。急性期と回復期の血清のオーム病ウイルスに対するCF価は64×から1024×へと上昇した。

第2例は58才の女性で4月10日に高熱(104°F)と重症肺炎で入院した。患者はペニシリン治療によつて徐々に回復した。回復期血清のCFは256×であつた。

第3例も発熱、肺炎、毒血症の診断で4月3日入院。この患者もテトラサイクリン投与で徐々に回復した。血清CF抗体価は64×から256×以上に上昇した。第4例は18才の女性で4月1日入院。その5日前から家庭でペニシリンとテトラサイクリン治療を受けた。2週間々隔で採取した血清の抗体価は8×と16×で、その後の血清についても検査する予定でいる。オームの種類は第1例と第3例はメキシコインコ(conur)で、第4例は尾長インコ(parakeet)であつた。第2例は死んだオームの他に、8カ月間飼ひ続けて現在もなお元気なオームとも接触があつた。

疫学調査からそれぞれのオームはバルチモアの別々の

小売商から買入れたことが判つたが、4羽中3羽は同じ卸商を通つておりニューヨーク市経由で輸入され、他の1羽はマイアミの商人を経て当地で売られたことが判明した。

(MMWR, Vol. 18, No. 19, 1969年5月10日号より)

○ジフテリア アリゾナ州 **Phoenix**

1968年11月から1969年5月1日の間に Maricopa 郡 Phoenix で12例のジフテリアの発生があり、3例が死亡した。アリゾナ州では過去5年間本症の発生は皆無で、1959年から1964年の間に僅かに5例の報告があるのみである。今回の流行の始まりは1968年11月の3例で、ついで12月に1例、本年2月に2例、3月5例、4月1例である。12例中11例(死亡3例を含む)は小児で、内10例はメキシコ系アメリカ人、成人の1例は60才のメキシコ系アメリカ人で農園労務者であつた。11例の小児から毒素産生陽性のグラービス型ジフテリア菌が、成人からはミーテイス型株が分離された。死亡例は予防接種を受けておらず、他の9例も予防接種を受けないかあるいは第1期接種を完全に終了していない者ばかりであつた。

疫学調査の結果11例の小児中7例は初発例と直接又は間接に接触が確認されたが残りの4例は患者とのはつきりした関聯をつきとめ得られなかつた。初発例は8才の少年で1968年11月11日に発症したが、その感染源は不明であつた。第2例は7才の黒人の少年で11月17日発症したが、初発例と同じ小学校の2年生であつた。2例共入院したがその病院に筋萎縮症で長期間入院中の13才の少年が11月26日発病した。第4例は6才の少年で、初発例の兄弟と同級生であつたが発病後10日目の12月23日死亡した。第5、6例は3月14日、17日の発病でそれぞれ4才と6才の少女で、患者の兄や姉が第4例と同じ小学校に通つており、それらが保菌者であることが確認された。第7例は9才の少女で2月21日発病、第8例は9才の少年で2月28日発病したが、感染経路は不明であつた。5月12日に12才の9例目が発病したが、これは第8例と同級生である。5月25日に第7例の同級生の8才の小児が発病した。最後の1例は6才の少女で4月に発病し死亡したが彼女の姉妹が保菌者であつた。共に地区の小学校に通つていたが、その学校からは他に患者の発生はなかつた。流行後患者の居住地区にジフテリア予防接種を施行したが、現在までに患者と接触した小学生、学令前的小児、近隣者に対して15,000人分のトキソイドと

3種混合ワクチンを使用した。

(MMWR, Vol. 18, No. 19, 1969年5月10日号より)

○ジフテリアの集団発生、カリフォルニア州 **Pacoia**

1969年3月から4月に当地の1家庭に属する11人の家族からジフテリア患者が7例と保菌者2例が発生した。第1例は8才男児で3月4日発症、その次週には母親を含む5人が同様の症状を發した。その家族全員を病院に隔離したが、発病した6例は培養上ジフテリア菌陽性であつた。保菌者が2名発見された。患者にはペニシリンと抗毒素療法を行ない、保菌者にもペニシリンを投与した。6例は薬効を見、続けて2回培養が陰性になつてから退院した。他の1名の患者と2名の保菌者とは菌が陰性にならなかつたので在院隔離を続け、エリスロマイシンを投与後ようやく陰性となり3例共5月に入つてから退院した。

4月24日になり、これまで菌が陰性であつた13才の女児に咽頭痛と発熱を見たがペニシリン投与後24時間以内に軽快した。しかし4月26日に行なつた咽頭培養で毒力のあるジフテリア菌が見付かつたので28日に入院して抗毒素とペニシリンを投与した結果、5月中旬には培養で菌陰性となり退院した。4月29日に家に残つた無症状の7名の培養を行なつた所、先に発病した2例が再び陽性であつた。そこで7例共にエリスロマイシンを投与したが副作用が強く、非経口ペニシリンに変更して5月23日までは全例陰性となつた。

11名の家族の内8例は予防接種を完了しておらず、その内の2例は全く予防接種を受けていなかった。他の3例のうち1例は充分量の予防接種を受けていたが、この12才の少年は終始培養上菌陰性で、他の2名は予防接種歴不明であつたがその内の1人の1才の女児も菌陰性に終つた。

調査したにも不拘感染源は不明に終つた。第1例の発症後患者と接触した33人の隣人の咽頭培養を行なつたが総て陰性に終つた。4月24日に本症が確定してからもこの家庭に屡屡出入りしていた2家族を培養した所、1家族は全例陰性であつたが他の家族の4人の子供の内3名から5月6日にジフテリア菌が検出された。この家族も隔離して保菌者にはペニシリン治療を施行した。

3月中旬に、患者が通学していた2つの学校に予防接種を行ない、更に5月12日に2回目の接種を施行した。

(MMWR, Vol. 18, No. 25, 1969年6月21日号より)